高等学校国語　教員初任者の皆さんへ

目　次

はじめに ……1

1 ―高校での国語の授業 ……2
2 ―古文の読解指導の注意点 ……5
3 ―現代文の読解指導の注意点……12
4 ―欠席連絡・代講・課題・休暇 ……16
5 ―教科担当として……19
6 ―私語への対応 ……25
7 ―叱り方 ……29
8 ―計画立案・実行・総括 ……30
9 ―担任業務の流れ……35
10 ―学級開き ……43
11 ―保護者対応……47
12 ―謝罪 ……49
13 ―入試業務 ……51
14 ― IT 関連……54
15 ―仕事とプライベート ……59

おわりに……63
あとがき……64

はじめに

本書『高等学校国語　教員初任者の皆さんへ』は、『高等学校国語　教職志望の皆さんへ』の続編として書きました。

前著では、教育実習に行く前から始めて教育実習を経て、採用試験、採用されてからの話で知っておいたほうがいいことを述べました。前著を知り合いの国文学の先生方に差し上げたところ、「ここを知りたいと思っていたところがピンポイントで書かれている」「これまでわからなかったことがよくわかった」「できれば、もっと早く知りたかった」とご好評を頂いたのですが、「大変役立つが、大学の教科書として使うのは難しい」と指摘されたので、当初『大学ですぐ使えるようなワークブックを次に作ろうか』と考えていました。

しかし、教員は赴任先によってすべきことも教え方も異なりますし、前著の反響の中で、さまざまな大学が、教職課程の中ですでに種々の試みをされていることを教えて頂き、教職用の基本的ワークは不要とみて、それよりも高校教員になって初めて分かったことに絞って説明してみようと思いました。

そこで、本書では、私の講師時代からのキャリア（教育困難校→進学トップ校→地元集中校→伝統校かつ中間校→工業科定時制→普通科定時制→私立女子校→私立男子校→私立共学校）から、多種多様な高校の国語科で、それぞれどのような教え方ができるか、また、教員になって授業の際に困った私語や叱り方について、そして、教諭になってやってみないとわからなかった担任業務や、学校での仕事の特殊な状況、先輩から教えてもらった教員の仕事の仕方などについて述べました。

すなわち、最初にさまざまな高校でのさまざまな国語の指導方法を説明するため、「1 ―高校での国語の授業」で授業展開のパターンを述べ、「2 ―古文読解指導の注意点」「3 ―現代文読解指導の注意点」で、古文・現代文それぞれの指導の際に注意すべきことを記しました。

次に、高校勤務で最初は尋ねにくい欠席連絡や休暇を「4 ―欠席連絡・代講・課題・休暇」で、教科担当として授業に入ったときに知っておくべき仕事や注意点を「5 ―教科担当として」で説明しました。そして、一般の高校で教えていく際に重要な「6 ―私語への対応」「7 ―叱り方」を述べました。私語はベテランでも対応が難しいものですし、叱り方は国語科のような科目の初任者では必ず悩むところです。

さらに実務的に仕事を回していけるように「8 ―計画立案・実行・総括」を説明しました。

また、教諭一年目の終わりから始まる担任の仕事を「9 ―担任業務の流れ」「10 ―学級開き」「11 ―保護者対応」「12 ―謝罪」で説明しました。

この他、学校としての外せない重要な仕事やその問題点を「13 ―入試業務」「14 ― IT 関連」で解説し、教員としての考え方・生き方について「15 ―仕事とプライベート」で述べました。

4 ～ 15 は、一見、国語科教諭とは無関係に見えますが、感受性豊かな人が多い国語科教員を応援するために書きました。

これから教員として頑張っていく方々のお役に立つことを願っています。

1―高校での国語の授業

生徒の能力レベルは、頭の回転や判断力だけを言うのなら、学校によってさほど差がつくものでもないように思います。すなわち、どの学校でも多少緩慢な人や判断力の弱い人はいますし、できる人・頭の切れる人もいるのです。

しかし、そうはいっても、小中での既習の有無や、予習できるかどうか、家で学習ができる状況かどうかによって、模試の偏差値はもちろん、学習内容レベル、そして、学校で教員が生徒たちにできることは大きく変わってきます。

また、高校は選抜されて入ってくることが多いですし、その選抜の積み重ねによってできた学校の伝統から、進学・就職などのレベルもある程度決まっているので、当然教える進度や内容が決まってくる、つまり教えるノルマとペースがあり、それは各学校で異なっている、と言っても過言ではありません。

したがって、教える際に教員・生徒に要求されることは、学校によって全く違うのですが、国語では、これまでの日本文学がどういうものであったかということを理解させるのは必須でしょう。

【古典を教える方法】

教える方法は勤務校によっていろいろです。結局、生徒たちが予習できるかどうか、そして、どこまで古文・漢文が必要か、によって教えることが変わってきます。それ以外のことは、教員の腕の見せ所です。考えられるパターンを挙げておきます。

⑴　文法・句法中心の授業　進学校などの予習前提の方法です。

Ⓐ指名訳させ、訂正解説。教科書の文法句法事項・内容のまとめを答えさせ、解説する。

Ⓑ本文の重要古語・重要漢語・重要語彙や古文では品詞分解、漢文では重要句法を、指名し答えさせ、解説する。

Ⓒ文法の練習問題を副読本などで解く。

Ⓓ同じ作品を扱った入試問題を解く。

Ⓔ資料プリント配布

⑵　文学史中心の授業　これもまたハイレベルです。

ⓐ指名訳させ、訂正解説。教科書の解説を説明・板書。

ⓑ作品の時代を調べさせ、解説・板書。

ⓒ文学史の副読本を解く。

ⓓ研究的な解説プリント配布・解説。

⑶　鑑賞中心の授業　古典を楽しむ授業です。

①短い範囲の全訳を板書・解説し、感想や意見を書かせ、文集にする

②一般・評論家の鑑賞を説明

③教員の鑑賞を述べる

④鑑賞用 DVD の利用

⑷　空欄穴埋めプリントでの授業　教育困難校などでのやり方です。

①プリント授業（教える内容や答えの範囲を絞る）……話の内容。現代語訳など

②ビジュアルに→絵を描かせる・作品の DVD 鑑賞

③プリントを回収し、綴じて試験前に返却（定時制では考査にプリント持ち込み可）

⑸　ノートとワーク　主に中間校でします

①ノートと板書で授業（板書内容を絞る→文法事項・重要古語・話の展開）

②グループワーク（課題を与えて話し合いをさせ、全員に課題の提出をさせる）

③ノートチェック（本文・現代語訳・重要語句・文法事項・学習のまとめ）

⑹　ハイレベル量産型

①プレパラトリーテスト・実力確認の小テストや課題提出

②指名で授業しどんどん進めて量をこなす。板書は重要事項を最小限、模範訳は口頭のみ

③練習問題を指名、答え合わせ。

④資料の充実。研究資料などの配付

どれが一番いいなどと言う問題ではないですし、載せている項目全部をする必要もありません。生徒と向き合って、何が必要かを考えて、いくつか組み合わせます。

気をつけることとしては、教育困難校で教える内容を徹底的に絞り込むのはもちろん、中間校でもいくらか教える内容を絞ります。中間校で、トップ校なみの詳細な説明をすると、わかってはくれるのですが、ほぼ全員が消化不良を起こします。すなわち、情報に溺れてしまい、定着が良くないのです。ですから、基本を教えて、わかっているかどうかの確認を行い、難しい内容については、発展的な内容だと指摘して、さらっと流すか、飛ばします。

各個人の資質の問題かもしれませんが、大量の情報に接すると、突然、意識をシャットダウンしてしまう人が出ます。新任の頃、「あの子ら、目を開いて寝てるから、気をつけてね」と先輩教諭に言われました。静かに聞いているからといって、分かっているわけではないのです。そういうときは、壁、それもツルツルの断崖絶壁に向かって話しているような気持ちになりますので、ちょっと話題を変えて、古典関係の楽しい話をします。ネタは自分で用意してください。

昔から教員がよく話していたネタは、清原元輔はハゲていて、祭行列で冠と鬘を落としてしまった（『今昔物語集』）、とか、紫式部は清少納言が嫌いで悪口を書き連ねている（『紫式部日記』）、とかでしたが、たぶん誰でも聞いたことはあるのではないでしょうか。